

16基の風車が建つ

あづち  
的大山島

平戸市

佐世保市

長崎市

# 風車を拒絶した島、 風車を翻弄される島

鶴田 由紀  
フリーライター

風車建設拒絶の島

うく  
宇久島

寺島

地球温暖化対策として全国に建てられた1500基あまりの巨大風車。低周波音などの騒音源となり近隣住民の健康に被害を及ぼしている。環境省は2010年4月から4年計画ですべての風車について健康被害の実態を調査することになった。巨大風車は農村の生活そのものにも影響を与えている。

## 風車建設拒絶の島

宇久島（長崎県佐世保市）は五島列島の北端に位置し、面積約25平方キロメートルで品川区より少し大きい程度だ。この宇久島と、西隣にある面積わずか1平方キロメートルの寺島に、合わせて50基もの巨大風車が建つという計画が持ち上がった。1基あたりの定格出力2000キロ

ワット、ブレード（羽根）の先端までの高さは100メートルを優に超える。島から佐世保市に新たに送電線を敷設する計画も含まれており、総事業費は約200億円だ。

島民は09年2月の地元紙の報道でこの計画を知った。だが事業者である日本風力開発（株）とグリーンパワー（株）は、08年7月の段階で、九州電力に売電申請をする際に必要となる土地使用承諾書に、署名捺印を求めてひそかに地権者宅を回っていた。元町会議員が事業者を手引きし、地権者に十分な説明もせずに承諾させていた（\*宇久町は06年に佐世保市と合併）。

元特定郵便局長の大岩進さんは、09年1月18日の『朝日新聞』の報道で巨大風車が低周波音騒音の発生源となることを知り、計画反対に向けて動いた。各地区の区長や観光協会会長などに呼びかけて「宇久若いもんを支援する会（平山忠一郎会長）」という運動団体を結成した。「風車建設拒絶の家」のステッカーを作り、反対する住民宅の玄関に貼って事業者の訪問を拒んだ。島の有権者の約7割に当たる1818人の署名を集め、県と市に対し計画に同意しないことを求めた要請書を提出した。



# 風車の近く 体に不調

## 音が原因?頭痛や不眠



新エネルギーとして期待されている風力発電所の近くで、頭痛やめまい、不眠などの体調不良を訴える住民が増えている。原因は説明されていないが、風車から出る音が関係していると考えられており、環境省が調査に乗り出した。背景には、風車が人家近くに設置されるケースが増えているという事情もありそうだ。

愛知県田原市の久美原風力発電所から500メートル離れた場所に住む大河剛さん(40)や家族が体に異変を感じたのは07年1月、風車が動き始めてすぐだった。体がしびれ、頭が揺さぶられるような症状が続いて眠れない。風車から遠く離れると楽になり、家に戻ると苦しくなった。

騒音を測ってもらおうと、低周波音で家が振動しているの体調不良の訴えが出ていた場所。

大河さんのような訴えは、田原市のほか、愛知県豊橋市、静岡県伊豆市、愛知県豊橋市、兵庫県南あわじ市で少なくとも約70人になる。豊橋市では、別の事業者が稼働させている1基のほか、中部電力(名古屋)が13基の新設を打ち出すと、人家に近いと反対運動が起きた。中電は、低周波音被害に対する安全基準値がなく、住民の理解が得られない」と計画を凍結中だ。日本で風力発電所の建設が本格的に始まったのは90年代末だが、地球温暖化問題が注目されるにつれて増え、07年度まで1409基に。当初は北海道や東北の海沿いなどだったが、ここ数年は適地が少なくともあつて、人家の近くに建ち始めている。静岡県の伊豆半島に約80基を設置する計画があるほどだ。ある風力発電事業者は「風がよく吹き、住宅のない場所があつても国立公園内だつたりして適地探しが大変だ」と話す。

低周波音問題への社会的な関心の高まりに「低周波音問題対応の手引書」(04年)を制作していた環境省は、豊橋市のケースなどを踏まえて、風車と体調不良の関係をめぐる海外情報の収集を開始した。一部で低周波音の測定を始めるなどしているが、大気生活環境省の志々目友博室長は「科学的に未解明で、まだ対策目標値が示せない」と言っている。

被害の恐ろしさを各地区で説明し、「宇久全体がひとつになって行動する、断固拒絶する」と、事業者との闘い方を指南した。自らの住む地区の区長宛に「着工されれば、私自身は島を去る」と反対の意思表示を迫る文書を送った。島民が信頼を寄せ二人の尽力によって島の運動は結束を強めた。その甲斐あつて、佐世保市議会09年度9月議会で朝長

### 住民の理解得

風力発電の問題に詳しい牛山泉・足利工業大学教授の話  
欧米に比べ、国土が狭く人口の多い日本は低周波音被害が起きやすい。国として積極的に取り組むべき課題だ。巨大な風車は近距離では圧迫感があり景観障害にもなる。事

『朝日新聞』2009年1月18日

### 牛に健康被害

則男市長は「地元とも合意が図られない限り現段階では本計画の実施はなかなか難しいと認識している」と述べた。

宇久島にはこのときすでに1基(1000キロワット)の風車が回っていた。高級牛として知られる黒毛和牛の繁殖を専業とするAさんは、風車から350メートルの場所に牛舎を所有する。その牛にここ数年、異常が目立つようになったという。肩や膝の関節が肥大していたり、背骨が曲がった子牛が生まれる。成長につれて極端になり、肉付きも悪いために安い値がつけられる。死産、子牛の突然死、発情の不安定なども見られ、これでは畜産経営が成り立たないと困惑している。Aさんは「風車のせいかと言えよそれはわからないが、40年以上牛を飼っていてはじめて」だと語った。

風車近くの別の繁殖農家は、09年9月28日付『読売新聞』佐世保版で子牛に奇形が出ていると大きく報じられた。風車が原因とは特定できないが、風車の影響を「つい疑ってしまふ」という声が紹介されている。



長崎県宇久島の「宇久若いもんを支援する会」の皆さん(左端が大岩さん)

宇久島の農家のほとんどは牛を飼育している。黒毛和牛の子牛は、神戸牛の基牛として高値で取り引きされる。その農家は「50年近く牛の飼育をしているが、初めての出来事」と語ったという。現在のところ、牛の健康被害の原因が風車であると言いつける科学的根拠はない。しかし、現に発生しており、風車近隣住民に不安を与えている。風車ができる前には発生しなかった被害であれば、風車が原因との疑いはぬぐいきれない。環境省の調査対象として加えるべきではないだろうか。





長崎県的山大島のCさんの牛舎と風車

## こんなはずじゃなかった

玄界灘に浮かぶ的山大島は、面積約15平方キロメートル、人口は宇久島の半分ほどだ。05年に長崎県平戸市と合併する前は、大島村という一つの自治体だった。この小さな島に16基（1基の定格出力は2000キロワット）の巨大風車が建ち並び、騒音被害を発生させている。島の東西に8基ずつ配置された風車群は、07年にエムアンドディーグリーンエネルギー㈱（M&D）と平戸市の共同出資会社である㈱的山大島風力発電所が建設した。

建設計画が持ち上がったのは97年。元村議Bさんによれば、当初は村営の宿泊施設いさりびの里に数基を建設して施設内の電気を賄うとい

う小さな計画だった。01年には750キロワットの村営風車29基に変わり、NEDOの補助金申請が採択された。九州電力と売電仮契約も結んでいたが、資金繰りがつかずに断念。補助金も売電契約も取り下げた。その後JFEエンジニアリング（旧日本鋼管）が名乗りを上げ、計画が進んだが、最終的にはM&Dと平戸市との共同出資に変わった。10年間で計画内容ばかりか事業者が二転三転した。

村は、これといった基幹産業も観光資源もなく、過疎化による農家の後継者不足にも悩んでいたため、風力発電所から「年間1億円の固定資産税が入る（Bさん談）」ことに大きな魅力を感じた。村には、過去に低レベル放射性廃棄物の処分場の話が来たこともあったという。さすがに

受け入れなかったが、次に来た風車は議会も満場一致で受け入れを決めた。ところが風力発電所の完成前に村は平戸市と合併し、固定資産税も売電収入もすべて平戸市の懐に入ることになった。

そして騒音が残った。牛飼いの農家Cさんは自宅と牛舎から140メートルの位置に風車が建っている。「当然気になるよ。（騒音は）どうですかなんて聞くより、うちに一週間泊まってみる。事業者は『なにかあれば対応します』と覚書を置いていたが、担当が次々に変わるし、対応が悪い。15年もこれ（風車）とつきあわなきゃならない。子どもが嫌がって帰省しなくなったらどうしてくれるんだ」と（筆者に向かつて怒っていた。別の牛飼いの農家（風車から210メートル）は、「ジェット機のような音。牛の早産が3年続き、今年の子牛が助からなかった。1カ月以上早産だと保険もおりない。何が原因かわからないが、風車ができるまで早産はなかった。おそろしくなつて牛を減らした。もう牛をやめた」と言った。

前出のBさんも息子が牛飼いをしており、牛舎から一番近い風車までは100メートルしかない。「ここ数

年、牛の突然死や歩行不全、起立不能、早産などが続いた。こんなに続いたことはなく、保健所も異常だと言っていた」とBさんの息子は言う。

「こんなはずじゃなかった。みんな、こうしたもんだい（仕方がない）と我慢している。行政に苦情を言っても『金がない、業者がやる』と逃げた。文句を言う者が馬鹿を見る」島を案内してくれたBさんは繰り返す。こう言っていた。宇久島とは違い、的山大島は皆、口が重く、諦めムードが漂っていた。ある島民は言った。「人や牛に影響があるなら、みんな反対した……」

宇久島に50基の風車が建ち並ぶ公算はかなり減ったが、事業者はまだ諦めていない。09年11月に東京大学の学者を引き連れ、「学習懇談会」と称して低周波音について島民を「教育」しなせようとやってきた。「風車の低周波音で健康被害は起り得ない」これが彼らの「教育」内容だ。風車ができるまでなかった被害が発生している事実を彼らはどう考えるのか。島民が声を上げないのを良いことに、「被害はない」と強弁し続けることはもう許されない。